学校だより　第８号

加曽利中

千葉市立加曽利中学校
令和６年３月22日

「奪い合えば足らぬ。分け合えば余る。」

卒業生の皆さん、皆さんの中学校生活は、新型コロナウイルス感染症に伴う「学校の新しい生活様式」により、様々な制約のある学校生活でした。しかし、そんな中でも、皆さんは今できることに精一杯取り組む姿を見せてくれました。

体育祭では、種目や競技時間に制約が残る中、どの種目にも全力で取り組み、盛り上がる場面ではみんなで思いっきりはじける姿が輝いていました。

金沢方面への修学旅行では、新幹線車内や班別行動の際、他の乗客・観光客への配慮を忘れず、節度をもって旅を楽しむとともに、二日目夜の全体レクでは、学年全員が一体となって熱く盛り上がりました。

そんな皆さんの姿は「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ。」というパラリンピックの父 グットマン博士の言葉を思い起こさせてくれました。

これから皆さんが歩んでいく世界は今、多くの困難な課題を抱えています。大地震や火山の噴火など自然災害を止めることはできませんが、戦争や民族・宗教問題など、人間が引き起こしている問題は、人間の力によって解決することができるはずです。

それなのに、究極の人権侵害、究極の環境破壊である愚かな戦争を、人間は繰り返しています。

しかし、私は、未来を担う君たち若い世代が、今までの政治家や国家の指導者がなしえなかった、国や人種、宗教の壁を乗り越えた、新しい一つの世界を創り上げてくれるのではないかと期待しています。

「奪い合えば足らぬ。分け合えば余る。」2011年３月、東日本大震災の時、トモダチ作戦として東北の避難所に支援物資を届けた米軍ヘリコプターの女性パイロットが体験し、感動したエピソードがあります。

それまで、世界の難民キャンプにヘリコプターで支援物資を届けると、いつも何百人もの群衆が殺気立って押し寄せ、物資の奪い合いになり、命の危険をも感じたことのある彼女が、恐る恐る避難所となっている学校のグラウンドにヘリコプターを降ろすと、さっと避難所の人々が並び、一列のバケツリレーができました。

整然と支援物資を三分の一ほど降ろしたころに、避難所のリーダーと思われる老人がヘリコプターに近づき「これで十分。ありがとうございます。」と礼を述べてきました。女性パイロットが「全部降ろしていいんですよ。」と声をかけると「いや、これで十分です。他にも困っている避難所がたくさんあるので、残りはそっちに運んでください。」と丁寧に断ったのです。

女性パイロットは「なんて、なんて気高い人々なんだろう」と、ヘリコプターで空に飛び上がった後も、涙が止まらなかったそうです。

「奪い合えば足らぬ。分け合えば余る。」「奪い合えば憎しみ。分け合えば安らぎ。」

世界中の人々が一つになり、地球の恵みを、全世界の人間だけでなく、すべての生き物で分かち合える、そんな美しい、新しい世界を、君たちが創り上げてください。

限りない可能性を秘めて、今、加曽利中学校を巣立っていく皆さんの前途に「幸多かれ」と祈って、式辞とします。

（第77回　卒業証書授与式　校長式辞より抜粋）

＜ 卒業生を送る会　3/1 ＞

卒業式を一週間後に控えた 3/1 に、体育館アリーナで「卒業生を送る会」を行いました。

歌、楽器演奏、ダンス、漫才、劇、ハンドダンス、思い出の写真スライドショーなど盛りだくさんで、学校生活の様々な場面で後輩たちをリードしてくれた卒業生への感謝の気持ちがあふれた発表でした。

異動された、3 年生がお世話になった先生方からのビデオメッセージや、3 学年職員からのサプライズ出し物も披露され、会場は大いに盛り上がりました。

ラストは、いつの間に撮影されたのか、卒業生から 3 学年職員への感謝のメッセージがスクリーンに映し出され、アリーナには温かい思いがあふれました。

１年生の劇

１年生によるハンドダンス

2 年生の劇

3 学年職員のサプライズ出し物

一週間後の 3/8、在校生や職員から卒業を惜しまれながら、154 名の卒業生が巣立っていきました。

卒業生はもちろん、在校生の式に臨む態度、歌も素晴らしかったです。進級する 1, 2 年生が、来年度は最上級生として、また、初めて後輩を迎える中堅学年の 2 年生として、それぞれ活躍し、新しい加曽利中学校の伝統を作ってくれるに違いないと確信しました。